神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 12 号

紅 取 遺 跡

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No.12

BENITORI

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
Nakaku Yokohama Japan
1 9 8 0

神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 12 号

目　　次

1.　紅取遺跡の発掘調査について…… 1

2.　遺跡の位置と調査の概要…… 2

3.　遺跡の状態…… 3

4.　出 土 遺 物…… 5

5.　結　　び…… 10

挿図・図版目次

第１図　紅取遺跡付近地形図…… 13
第２図　Ａ地点地形図…… 13
第３図　第１トレンチ北面実測図…… 15
第４図　第３トレンチ北面実測図…… 15
第５図　第４トレンチ北面実測図…… 17
第６図　第２トレンチ北面実測図…… 17
第７図　出土土器拓本(１)…… 19
第８図　出土土器拓本(２)…… 21
第９図　紅取遺跡出土土器拓本(収蔵品)…… 23

図版１　(1) Ａ地点遠景(南方より)
　　(2) Ａ地点の状態(北方より)
図版２　(1) 第１トレンチ(西方より)
　　(2) 第４トレンチ(西方より)
図版３　土　　器 (1)
図版４　土　　器 (2)
図版５　石　　器

調査主催者……神奈川県立博物館長　戸　栗　栄　次

発掘担当者……神奈川県立博物館専門学芸員　神　澤　勇　一

調 査 期 日……昭和53年12月５日～19日

報告書執筆……神　澤　勇　一

1. 紅取遺跡の発掘調査について

紅取遺跡は横浜市磯子区磯子町字紅取の一角に残された縄文時代早期から中期にかけての遺跡で、特に早期の古い段階を占める撚糸文土器の良好な資料とこれに伴う多数の礫器、それに南関東地方本来の土器ではなく東海地方の系統をひく早期末の土器の一群を出土することによって、よく知られている。

撚糸文土器を出土する遺跡は言うまでもなく他時期に比べ例が著しく少なく遺物も乏しい。この点、紅取遺跡は縄文文化の起源と展開をめぐる諸問題の解明にとって貴重な存在であり、横須賀市夏島・横須賀市平坂・横浜市大丸の諸遺跡における一連の発掘調査によって、早期文化の研究が新な局面を迎えた昭和20年代後半(1950)には、研究者や郷土史家がしばしば訪れ、資料の採集や時には部分的発掘を試みたという。しかし、現在のところそうした発掘結果の発表は見当らず、僅かに個人所蔵の資料の一部が誌上に断片的に引用あるいは紹介された程度であった。そのため遺跡のもつ重要性にもかかわらず、実態は不明のまま時は過ぎていった。ところが昭和30年代のなかばに遺跡の存在する丘陵にゴルフ場が建設されるという事態が生じ、大規模な削平と土盛工事により地形は一変し、紅取遺跡は遂に学術的調査が加えられず、実態不明のまま消滅あるいは大部分を失ったのは明瞭と認められるに至った。しかし残部の存否確認はもちろん、仮に残存部分を確認出来たにせよ、発掘調査の実施は実際問題として絶望的と考えざるを得なかったのである。

本館収蔵品中には、この紅取遺跡出土の縄文時代早期の完形土器、土器破片一括、礫器・局部磨製石斧・打製石斧・磨製石斧等の石器約 150 点がある。それらは長年にわたり横浜市内諸遺跡出土遺物の収集保管に尽力されてきた林国治氏のコレクションの一部で、本館の設立準備中に、同氏のご厚意により収蔵されたものである。いずれも資料的価値が高く、とりわけ撚糸文土器については、同遺跡でそれまで出土の知られていた夏島式土器、稲荷台式土器、大浦山式土器の諸型式のほか、撚糸文土器群中最古の段階に位置づけられる大丸式土器の破片20点余を含んでおり、この遺跡の年代が早期初頭までさかのぼることが知られた。そこで、大丸式土器の追求と収蔵されたこれらの資料をより活かすために、ぜひ発掘調査を行い遺跡の実態を把握したいと思ったが、既に遺跡は前述のような状態となり、断念せざるを得なかった。

ところが昭和52年、日本住宅公団がゴルフ場を買収し、跡地に住宅を建設する計画が起り、横浜市教育委員会で確認調査を行った結果、小範囲ながら 2 地点に遺物包含層が残存していたという。関係者に照会したところ、事前調査の予定はあるが時期方法等は未定の由であったので、かねてよりの意向を説明し、一部発掘調査させてほしい旨依頼した。誠に無理な申し入れであるのは重々承知の上であったが、幸い関係者が非常な理解を示され、調査実施の了解と承諾を頂くことができた。

発掘調査は昭和53年12月 5 日から同月19日まで延15日実施した。このほど資料整理が一応終

了したので、ここにとりあえず概要を報告する。

今回の調査にあたっては日本住宅公団関東支社、横浜市教育委員会文化財課、神奈川県教育委員会文化財保護課からご配慮を頂いた。現地では資料・遺物の保管その他について横浜プリンスホテルの方々より、発掘作業については明治大学、国学院大学、東海大学の学生諸君より多大なご援助を頂いた。また、原稿作成にあたっては本館の中野万年、井上久美子、川口徳治朗の諸氏の手をわずらわせた。稿を起すに当り、記して深く感謝の意を表す次第である。

2. 遺跡の位置と調査の概要(第１図、第２図、図版１)

紅取遺跡は国鉄根岸線磯子駅の西北約500ｍの地点に位置し、横浜市磯子区磯子町字紅取にかかる丘陵地帯の一角に残されている。

この丘稜地帯は、標高50～70ｍ。磯子区南端の杉田町方面から東京湾岸に沿って北へ伸び、磯子町付近では東西約２㎞の幅をもち、西を大岡側に北を堀割川に劃され、大小幾つもの谷が随所に入りこみ相当複雑な地形を示す。また東側は東京湾に面し海蝕崖が連なり、崖際における標高は65ｍ前後をはかる。今日では埋立られ大工業地帯と化したが、昭和30年代なかばまでは崖下を走る国道16号線の際まで波が打ち寄せ、崖面までの距離はせいぜい200ｍ前後にすぎなかった。

遺跡はこの丘稜の東端部、磯子駅を見下す崖上に立つ横浜プリンスホテルの西側に続くゴルフ場内にある。ゴルフ場となった個所は、西側に北方へ開口する谷が入り、北側にも西北方へ開口し前者と合する谷が入っているうえ幾分小高くなっており、南北約500ｍ、東西約150ｍ前後の半島状を呈する。南北両端にはそれぞれ高所があり、中間には、さきに述べた北側の谷へと続く浅い凹所が湾入している。そのため半島状部分全体は緩やかな弧を描く。南北両端における高所の標高は現状で前者が76ｍ、後者が70ｍ（日本住宅公団作成の500分の1地形測量図による。以下の標高も同じ)。ともに中間地点に向けなだらかな斜面をもって続き、また中間地点における標高は67ｍとなっている。削平と盛土のため地形が著しく変わったけれども、このような形状はゴルフ場建設前の旧い地形図に現わされており、原地形の面影を多少止めると言えよう。だが、現地での観察と所見からすれば、やはり少なからぬ差が認められる。

遺物包含層は両端の高所に一個所ずつ残存し、北側高所のそれはＡ地点、南側高所のそれはＢ地点と命名されている。今回の調査はＡ地点に対して行なった。

Ａ地点の存在するゴルフ場北端の高所は標高70ｍ。頂部は平坦面をなしているが、ところどころに地山の岩盤が砕けた角礫や関東ローム層の露出があり高所の北と北東に残る当初のままの山林部の傾斜に対しきわめて不自然な地形を呈する。明らかに相当な削平を加えて造り出された平坦面であり、本来は現在より少なくとも５～10ｍ程度高かったのではないかと思われる。遺物包含層はこの高所頂部に続く東斜面に、推定８×15ｍの範囲で、ほぼ南北に帯状に残って

いたが、この地点でも削平が土層の一部に及び、本来の状態ではなかった。

調査はトレンチ法で行い、周辺の状況を確認する目的も兼ねて遺物包含層残存個所を中心に頂部平坦面東端から東側斜面にかけ３本のトレンチ（第１～第３トレンチ）を平行に設定、また第１トレンチの延長線上の頂部に１本（第２トレンチ）を設定、順次発掘した。なお、各トレンチ断面実測図に示したレベルは第１トレンチにかかるベンチマーク（ＢＭ６＝69.97ｍ）を原点としている。

3. 遺跡の状態

(1) 第１トレンチ（第２図Ｔ－１、第３図）

高所頂上の平坦面東端から東斜面にかけ、幅２ｍ、長さ20ｍで設定した。層序は断面実測図に示したように、10ｍ地点（各トレンチとも西端を０とする）以東では原状を比較的よく残すが、西半部では削平されており、地山あるいは関東ローム層上に直接盛土が載る。この二次的土層はトレンチのほぼ全域を覆っており、したがって本来の層序は東半部の所見から見てⅠ＝褐色土層(表土)、Ⅱ＝黒色土層、Ⅲ＝暗褐色土層、Ⅳ＝関東ローム層の順になるものと思われる。

Ⅰ層の褐色土は旧表土である。有機物と火山灰を含む腐蝕土で、11ｍ地点以東に断続的に存在する。攪乱を受けた個所が目立ち、遺物の包含は少なく、撚糸文土器群に属する破片少数と石器７点が散慢に出土した程度であった。

Ⅱ層の黒色土層は多量の有機物を含み、文字通り黒色を呈する粘性のきわめて強い土層である。トレンチ東半部に存在したが16ｍ付近から水分が多くなり、粘性を増して乾燥すると石炭塊状になる。この層は18ｍ付近で消滅している。

Ⅲ層の暗褐色土層は火山灰と有機物を含み暗褐色を呈するやや粘質の土層で、10ｍ地点以東で堆積が厚くなる。第１トレンチではこの層に遺物の包含は認められなかった。

暗褐色土層下の関東ローム層は、地山の岩盤上に最高50cm前後の厚さをもって断続的に堆積し、遺物の出土はない。

以上の各層中には炉址をはじめ生活面の存在を示すような形跡は全く認められなかった。平行する第３、第４トレンチでもこの点は同様である。

(2) 第３トレンチ（第２図Ｔ－２、第４図）

記述の都合上、第３、第４トレンチの状態を先に説明したい。

第３トレンチは第１トレンチと平行に、南へ３ｍ離れた位置に幅２ｍ、長さ18ｍで設定した。層序の状態は第１トレンチと基本的に異ならないが、ここでは東半部に存在する黒色土層が末

端においても20cmの厚さを示し、暗褐色土層の堆積も65cmと厚くなっている。

遺物は14～18m地点の褐色土層下部、黒色土層、暗褐色土層の上端から30cm前後までの部分に多く、撚糸文土器群に属する土器破片と石器８点が出土した。なお、旧表土である褐色土層中に勝坂式土器破片１点が、暗褐色土層上端に前期（型式不明）の土器破片１点がそれぞれ混在した。

(3) 第４トレンチ（第２図Ｔ―４、第５図）

第４トレンチは第３トレンチと平行に、南へ５ｍ離れた位置に幅２ｍ、長さ18ｍで設定した。基本的には層序、状態とも第１トレンチ、第３トレンチと異るところがない。ただ東半部においては褐色土層が完全に削り去られ、盛土の下は黒色土層となっている。黒色土層は第４トレンチの場合16ｍ地点から始まるが、その部分も削平が深く及んでおり、もとは更に斜面上方に伸びていたのではなかろうか。また暗褐色土層はトレンチ東端で２ｍに達し、三トレンチ中最も堆積が厚い。地山の南方への傾斜に従って次第に厚く堆積したものと認められる。

関東ローム層は堆積が薄く、13～17ｍ地点の間では僅かに痕跡を残すに過ぎず、地山の岩盤上に暗褐色土層が直接堆積していた。

遺物の包含は第３トレンチの場合と同様に14～18ｍ地点の黒色土層中と暗褐色土層の上端から30～40cm前後までの間に多い。撚糸文土器群に属する土器破片とともに石器20点が出土したが、黒色土層上端に勝坂式土器の小破片２点が混在した。

また、トレンチ西端では関東ローム層上面に浅く喰い込んだ状態で、口縁上に縄文、胴部器面に縦走する撚糸文を付けた特異な撚糸文土器１点（第７図・図版４―21）の出土をみた。

(4) 第２トレンチ（第２図Ｔ―２、第６図）

第２トレンチは第１トレンチの延長線上に、西端から10ｍ離れて、幅２ｍ、長さ10ｍで設定した。この付近では既に削平の形跡が明瞭であったが、念のために発掘したところ、果して地山を削平した上に盛土を行なっており、東斜面で認められた各層は全く残っていない。さらに高所西側斜面付近における状態も同様であり、この部分についてはトレンチの増設を打ち切った。

Ａ地点の所見

以上に述べたとおり、設定した４本のトレンチの結果と付近の状態から、遺物包含層は高所東側斜面に僅かではあるが、比較的良好な状態で残存し、遺物は表１、表２に示したように、特に第３トレンチ・第４トレンチの黒色土層中と暗褐色土層上部から多く出土することが知られた。遺物包含層の中心は、おそらくその付近と考えてよかろう。

しかし、褐色土層、黒色土層、暗褐色土層の上端には撚糸文土器群の破片とともに４点なが

ら前期と中期の土器片が混在したうえ、撚糸文土器群の破片がかなりまとまって出土した暗褐色土層中でさえも炉址、焼土その他の生活面の存在を明示する痕跡は認められなかった。また各トレンチの東端から２～３ｍの間は地山の傾斜に従って、土層の傾斜が緩やかになっている。こうした点で、Ａ地点の遺物は、おそらくより高い位置（既に削平された）に残されたものが斜面を転落し、二次的に堆積したと考えるのが妥当であろう。

4. 出土遺物

土器、石器、および土製品がある。それらのほとんどは前述のように第１トレンチ・第３トレンチ・第４トレンチの東半部において出土し、特に黒色土層と暗褐色土層上部に多かった。

(1) 土器（表１、第７～８図、図版３～４）

すべて小破片で、総数514点をかぞえ、うち510点が撚糸文土器群に属する早期の土器破片と認められる。残りの４点は、暗褐色土層上端で出土した波形竹管文の付いた前期（型式不明）の土器破片１点、褐色土層・黒色土層・暗褐色土層上端で出土した隆線と爪形文の付いた勝坂式土器の破片３点であるが、これらは単なる混入と思われるので、ここでは出土の事実を記すにとどめたい。

早期の土器破片は一般に保存状態が不良である。特に、黒色土層中と各層の黒色土層に接した部分に包含されていたものは器壁が脆くザラザラに荒れていて、文様の種類、器面の状態を確かめることの困難な例が少くない。その原因は黒色土層の質によるものと考えられるが、詳細は不明である。検討の対象としがたい例は全体で217点（42%）に達し、表１ではそれらを「判別不能」として一括した。それらを除く293点は、施文で大別すると、撚糸文の施されたもの223例、縄文の施されたもの36例、無文と擦痕を残すもの34例となる。数の上では撚糸文の施されたものが著しく多いが、同一個体と思われる破片も認められるし、器面が荒れて区分の困難な破片が217例もあるから、これは絶対的な結果ではない。ただ、撚糸文の施された土器が多数を占めることは誤りなかろう。

これらの土器は、特徴をとらえやすい口縁部破片を中心に文様原体、施文手法、器形、器面の状態等により、さらにＡからＦまでの６類に分類できる。

Ａ類（第８図・図版４－27）

器面に比較的密接した撚糸文が口縁と直角に施され、また口縁上端には縄文が施されたもの。Ａ類は図示した１例のみである。口縁は厚く、僅かに外方へ突出する。器面に原体を強く押しあてながら回転させているため、文様はいずれも鮮明である。同じ原体で１個の土器の器面と口縁上端に施文するのは大丸式土器における撚糸文と、井草式土器における縄文の例があるが、

Ａ類においては撚糸を細い棒に巻き付けた「絡条体」と「二重撚りした撚糸」という二種類の原体が併用されている点が注目される。原体の撚りは撚糸文がＲ、縄文がＬＲである。

Ｂ類（第7図・図版3－1～9・12・14・15、第8図・図版4－23・28・29）

条の間隔が密な撚糸文が器面全体に施された一群。６類中最も多く185例を数える。文様は口縁直下から始まり、条の走向は一般に口縁と直角をなし、幾分右傾または左傾する。なかには23のように強く傾斜した例もあるが、数は少ない。原体の撚りの種類は判別困難なものが多いけれども、調べ得た例はすべてＲであった。絡条体を器面に強く押しつけながら回転施文しており、圧痕は深く、鮮明である。文様は器面全体にすき間なく施され、絡条体の単位を把握し難い。

本類の口縁部はあまり肥厚せず、断面の形状には末端が丸味を帯びるもの、尖り気味に薄くなっているもの、幾分角張ったもの、内側が削がれたような形を呈するものなど、バラエティがある。器形は口辺部が僅かに外反する尖底深鉢形と考えられる。

Ｃ類（第８図・図版４－16～22・30）

口縁部の形状その他がＢ類と変わらず、撚糸文の代わりに縄文が施されている一群である。

縄文は口縁直下から始まり、条の走向をみると口縁と直角をなすか、幾分右傾または左傾する。二重撚りした撚糸を器面に強く押し付けつつ回転させたため、節は粒が大きく、圧痕も深い。原体の撚りは器面の荒れにより種類を明確に判別し得る例が少ないが、ＲＬにほぼ限られるのではないかと思われる。文様はＢ類同様に器面全体にすき間なく施されており、原体の単位を把握し難い。

Ｄ類（第７図・図版３－10・13、第８図・図版４－24・25））

条の間隔の粗い撚糸文が施されている一群である。

施文は口縁の少し下から始まるのが普通らしい。文様は間隔をあけて施される傾向があり、また、撚糸を軸に巻くさいの間隔が広く、撚り自体もゆるいため条が乱れがちとなり、節も細長く流れるのが特徴と言えよう。撚りはほとんどがＲであるが、Ｌも認められる。口縁部は頸部付近から徐々に厚さを増し、一般には断面形が乳棒状を呈する。Ｂ類、Ｃ類と異なり、器面が施文前に磨かれ、焼成も幾分良く、明褐色を呈した例が多い。10は本類の中でやや特殊な例である。なお、判別不能とした土器破片の中に、本類の疑いのあるものがかなり認められる。

Ｅ類

口縁部の形状、器面の状態等がＤ類に酷似し、縄文が施されている一群である。数が少ないうえ保存状態が不良なので、挿図、図版には示せない。

縄文は原体の押圧が弱いため浅く、圧痕も明瞭性を欠く。Ｅ類の撚りにはＲＬとＬＲが認められるが、前者の方が多いようである。

Ｆ類（第８図・図版４－22・26）

撚糸文、縄文その他の文様が一切施されていない一群を一括した。

口縁部断面形、器面の状態等にややバラエティがあるが、大別すると、器面がよく篦磨きされたものと、擦痕を残すものとの二つになる。口縁部の形状は断面が乳棒状を呈するもの、多少角張るもの、尖り気味に薄くなるもの等が認められ、そのうち乳棒状を呈する例が比較的多い。色調はＤ類、Ｅ類同様一般に明るく、焼成も良いものが少なからず含まれている。

以上に述べた６類は、それぞれが示す特徴により、次の諸型式に比定してよいと考えられる。

Ａ類は器面に撚糸文、口縁上端に縄文という二つの異なった文様が併用されている点、特異な存在と言える。

いまのところ他に類例を知らないが、口縁上端への施文という点において、大丸式土器、井草式土器との共通性が認められる。神奈川県夏島遺跡、同・大丸遺跡では、口縁上端と器面に施された撚糸文を特徴とする大丸式土器に、同じ部位に施された縄文を特徴とする井草式土器が伴出している。大丸式土器と井草式土器とは平行的関係にあると考えられているが、二型式が共存する事実からみて、本類のように、同一個体に二種類の文様が施された例が生ずるのは不自然ではない。Ａ類は口縁部の形状と器面の撚糸文が主文様である点、大丸式とより近似を示し、多分に偶発的な存在と思われるが、一応同式に比定するのが妥当であろう。

Ｂ類とＣ類は、前者には撚糸文が、後者には縄文が施されているという違いはあるが、口縁部の形状に差はなく、また文様はともに条が口縁部に対し一般にほぼ直角に走り、器面への原体の押圧が強いため圧痕が深く、かつ全面にすき間なく施されている。これらの諸点は夏島式土器と特徴を同じくするものであり、Ｂ類とＣ類は同式に比定できる。

Ｄ類はＢ類と同様に撚糸文の施された土器であるが、文様の条の間隔が粗く、原体の撚りが弱いためもあって節が崩れ、条も乱れがちとなっている。圧痕も浅く、鮮明さを欠き、Ｂ類との間に明瞭な違いが認められる。器面は施文前によく磨かれており、口縁部は断面形が一般に乳棒状を呈する。Ｄ類が示すこれらの点は稲荷台式土器の特徴と一致している。

Ｅ類は例数が非常に少ないが、文様が縄文であるものを除けば、Ｄ類と差がほとんどない。本類は稲荷台式土器のうち、縄文の施された一群の土器に相当するものと考えられる。

無文土器と擦痕をもつ土器をＦ類として一括した。

本類はややバラエティがあり、更に細分できそうである。したがって多少問題を残すが、その多くは器形、器面の状態、焼成等において、稲荷台式土器に伴う無文土器と特徴を同じくするものである。こうした諸点からみて、Ｄ類、Ｅ類、およびＦ類の一部は稲荷台式土器として

比定するのが妥当と考えられる。

なお紅取遺跡からは大丸式土器・井草式土器（第９図ａ～ｆ）、大浦山式土器および東海地方の系統をひく早期末の土器の出土が知られているが、今回の発掘範囲ではいずれも認められなかった。

(2) 石　器（図版５－31～46）

片刃形礫器、両刃形礫器、局部磨製石斧、打製石斧、剥片石器、スタンプ形石器、磨石の９種類35例をかぞえる。表２に種類別例数と出土層位別例数を示したが、35例中19例が第４トレンチの黒色土層と暗褐色土層上部から出土している。

片刃形礫器

礫器と言う名称は莫然としておりあまり適当ではないが、ここでは礫の一端に刃を付けただけか、刃に接する部分を僅かに整形する程度で器体がほぼ自然礫同様の形状を呈した石製刃器を指すことにしたい。

片刃形礫器は長さ10cm前後の薄手で細長い礫の一端に、片面から数回の敲打を加え、粗雑な片刃をつくり出したもの。14例ある。刃の幅が34・35・37のようにせまいものが６例、39のように広いものが３例、刃に続く側面にも刃部と同様な方法で敲打による整形が加えられているものが４例あり、バラエティが認められる。

なお、片刃形礫器の42は前の諸例と異なり、礫を大きく打割ったさい生じた鋭い稜を直接刃として利用したものである。

両刃形礫器

外観は片刃形礫器と同様であるが、礫の一端に両面から数回の敲打を加え、粗雑な両刃をつくり出したもの。３例出土した。刃先はいずれも鈍い。

片刃形礫器と両刃形礫器は、ともに斧の機能をもつものと考えられる。

局部磨製石斧

刃の部分だけに研磨を加えた石斧で、８例ある。それらの器形と製作手法をみると、二つの種類が認められる。

一つは片刃形礫器の刃部に粗い研磨を加えたもので、剥離面が一部残っている。破片を入れて４例ある。32は小型であるが、他は推定10cm前後の長さをもつものらしい。

他の一つは平な礫の周囲を打欠いて斧形に整え、刃部にのみ研磨が加えられているもの。２例ある。刃はいずれも両刃で、刃先きが直線状を呈する。器面はほとんど自然面のままである。

局部磨製石斧のうち小型のものは、いわゆる斧としての機能よりも、手斧の機能をもつと考えられる。

打製石斧

完形品１例、破片２例があるが、完形品は風化が著しく、細部の形状を確め難い。破片のうち１例は両刃で、刃幅が６cmと長い。側面が両面から敲打を加えて整形されているのみで、両面に広い自然面を残す。器形と側面の整形状態は33の局部磨製石斧にちかい。他の１例は、片面は全面敲打による整形が及んでいるが、他面は自然面のままである。刃は粗雑で片刃状を呈する。

剥片石器

31と43の二例で、礫そのものに加工した石器が多い中で、注目すべき存在と言えよう。

31は長さ5.5cm、厚さ0.3cm。細長い剥片の剥離面の一端を僅かに研磨し、鋭利な刃を付けただけのもので、他に全く加工の痕跡がない。刃は片刃である。31はその器形から、ノミと同様な機能をもつものと推定される。

43は片面に自然面を残す横長の剥片に加工したもの。主に剥離面の側からこまかな打欠きを加えて、長い刃を付けている。本例はスクレイパーの機能をもつものであろう。

スタンプ形石器

断面が円形または扁円形を呈する長手で大型の礫を途中から割り、新に生じた面を使用したもの。45・46を含め４例ある。いずれも割った面と縁が損耗している。45は破片で現状で長さ６cm、46は長さ7.8cm。

打割った面と縁の部分に磨耗と小さな欠損が認められる点で、敲石あるいは磨石に似た機能をもつと考えられる。出土した石器の中に、いわゆる敲石が１例もないのは、スタンプ形石器の用途を暗示するものかも知れない。

磨石

44の１例だけである。平面が隋円形を呈するごく一般的な形状の磨石で、片面の中央に長径３cm、短径２cmで、深さ０.４cmの浅いくぼみが設けられている。

Ａ地点から出土した石器は、遺物包含層中に前期および中期の土器破片の混入があるが、種類、特徴、出土状態等からみて、一応この地点の主体的土器である撚糸文土器群に伴うものと見做して大きな誤りはないと思われる。ただ惜しむらくは、遺物包含層が前述のような状態であるため、どの型式に伴うかは決定し難い。

これらの石器は例数に比べて種類が豊富である。ここでは一応９種類にわけたが、最も素朴な片刃形礫器でさえ刃幅の広狭と器体の大小により更に細分する余地がある。さらに刃部のみを研磨した局部磨製石斧の一部は片刃形礫器と外観上は大差がなく、刃をつくり出すにあたって剥離面を設けるさい同じ手法が使われている。むしろ必要に応じて、片刃形礫器の刃を研磨したという感が強い。これらの点は、撚糸文土器群に伴う石器の分化がかなり進んでいたことを暗示するものではなかろうか。

(3) 土製品

有孔土製円板が１例ある。土器破片の周囲を丸く磨いて作った円板の中央に１孔を穿ったもの。直径５㎝、穿孔は両面からあけられており、直径0.5㎝をはかる。

本例は第４トレンチの暗褐色土層上部から出土したが器面が著しく荒れ、もとの土器の文様を察知することは困難である。出土層位からみて、撚糸文土器群のうち、夏島式土器か稲荷台式土器に伴う可能性が多い。用途は不明である。

結　　び

発掘調査を実施した結果、紅取遺跡Ａ地点は撚糸文土器群を含む遺物包含層で、旧ゴルフ場北端に存在する高所の東斜面の一部に、帯状に残存することが明らかになった。

しかし、東斜面に設定した第１、第３、第４の各トレンチにおいては、削平による攪乱や欠失が著しいにしても、比較的状態の良い東半部でさえ、褐色土層、黒色土層、暗褐色土層、関東ローム層の各層中に、炉址、焼土、ピットその他の生活址の存在を明示するような遺構や形跡はみられなかった。遺物の出土状態をみても、第４トレンチ東端の黒色土層と暗褐色土層上部から最も多く出土したが、暗褐色土層上部下半だけに夏島式土器に比定されるＢ類とＣ類だけが包含されていた以外には、Ｂ類と稲荷台式土器に比定されるＤ類、Ｅ類、Ｆ類が混在し、層位による土器の出土量の差異はもちろんのこと、その傾向すら認められない。第１トレンチ、第３トレンチの場合も、同様な状態であった。

次に、平行して設定した３本のトレンチの土層の堆積状態をみると、各層とも西北から東南へ行くにつれ、地山の傾斜に従って厚く堆積する傾向をもち、また各トレンチ中央部では傾斜が最も強い。

これらの所見を統合すると、この地点に包含されていた遺物は、かつてより上方にあった生活址から斜面へ転落し、第４トレンチ東端付近を中心に散乱したものと考えられる。生活址の存在が予想される部分は既に削平されており、その位置を確めるすべはない。しかし、この地域において撚糸文土器群を出土する遺跡の一般的な立地に照らし、あえて想定すれば、生活址の位置はゴルフ場に接し東北方へ張り出した半島状の部分から、ゴルフ場北端の高所へ続く鞍

部あたりにあった可能性が大きいと思われる。

遺物については当初期待していた大丸式土器と井草式土器は発掘部分からは遂に出土せず、僅かに両者の特徴を兼備したA類（27）が1例認められたにすぎない。しかし、なにぶん発掘範囲が狭いので、ただちに有無の判定を下すのは妥当ではない。なお、A類は目下のところ他遺跡での出土例を知らないが、大丸式土器と井草式土器の関係を考える上に、注目すべき資料である。

紅取遺跡でその出土が注目された東海地方の糟畑式土器の系統をひく早期末の一群の土器もまた、A地点では見出せなかった。しかし、B地点には、調査中同地点を検分したさい、その破片が散見された。A地点とB地点は直線距離で約300 m離れている。従来、紅取遺跡は単一の遺跡であるかのように扱われてきているが、実際には、数遺跡から成るものと考えられる。

（神　澤　勇　一）

参考文献

杉原荘介・芹沢長介「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告　考古学第二冊　昭和32（1957）年

芹沢長介「神奈川県大丸遺跡の研究」駿台史学第７号　昭和32（1957）年

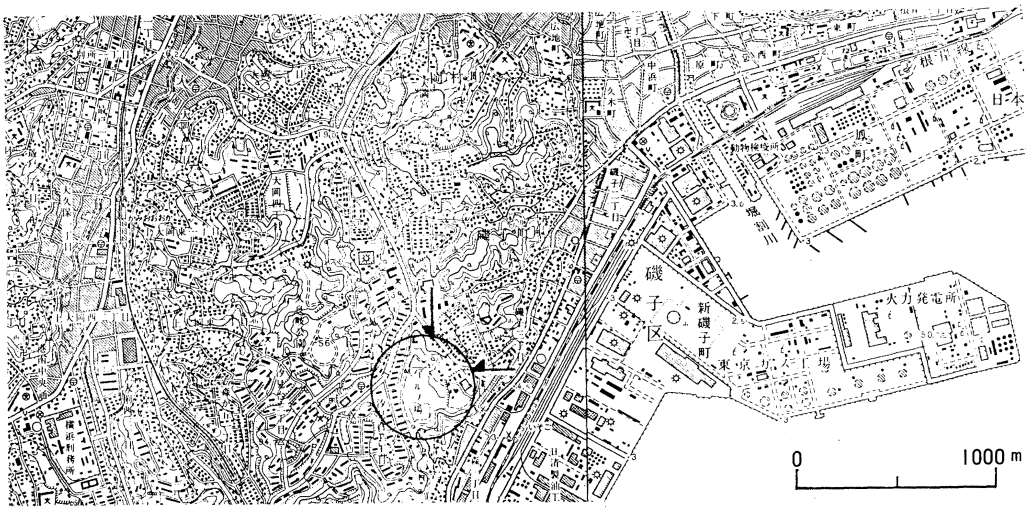
岡本勇「相模・平坂貝塚」駿台史学第３号　昭和28（1953）年

表1 層位およびトレンチ別土器出土例数

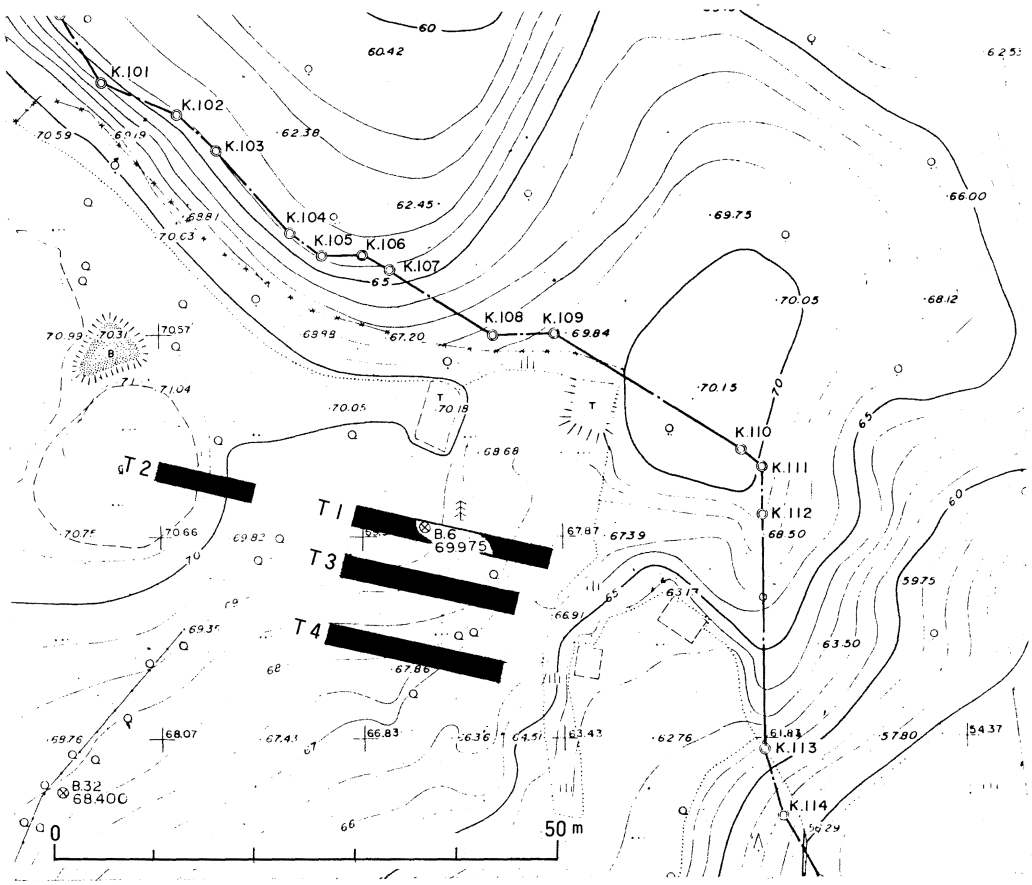
層位	土器／トレンチ	A類	B類	C類	D類	E類	F類	判別不能	トレンチ別出土例数	層位別出土例数
褐色土層	T1	0	18	5	2	0	4	19	48	109
	T3	0	32	5	5	0	6	5	53	
	T4	0	2	0	0	0	1	5	8	
黒色土層	T1	0	0	0	0	0	0	0	0	172
	T3	0	20	6	3	0	9	33	71	
	T4	0	30	3	9	0	2	57	101	
暗褐色土層	T1	0	0	0	0	0	0	0	0	213
	T3	0	26	5	7	1	8	39	86	
	T4	0	57	9	11	2	3	52	127	
関東ローム層	T1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	T3	0	0	0	0	0	0	0	0	
	T4	1	0	0	0	0	0	1	1	
類別出土例数		1	185	33	37	3	34	217	総数	510

表2　層位およびトレンチ別石器出土例数

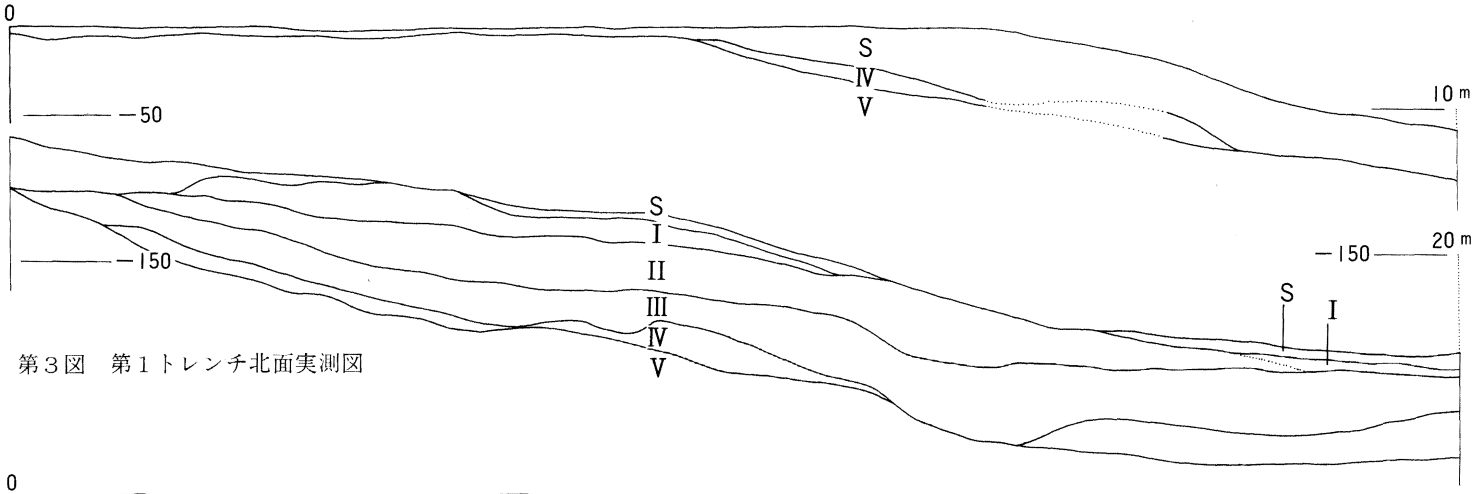
層位	石器／トレンチ	片刃形礫器	両刃形礫器	局部磨製石斧	打製石斧	剥片石器	石スタンプ形器	磨石	トレンチ別出土例数	層位別出土例数
褐色土層	T1	3	1	0	1	0	1	1	7	9
	T3	1	0	0	0	0	0	0	1	
	T4	0	0	1	0	0	0	0	1	
黒色土層	T1	0	0	0	0	0	0	0	0	15
	T3	3	0	0	0	0	0	0	3	
	T4	5	0	0	3	2	2	0	12	
暗褐色土層	T1	0	0	0	0	0	0	0	0	11
	T3	1	1	2	0	0	0	0	4	
	T4	3	1	0	2	0	1	0	7	
関東ローム層	T1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	T3	0	0	0	0	0	0	0	0	
	T4	0	0	0	0	0	0	0	0	
種類別出土例数		16	3	6	3	2	4	1	総数	35



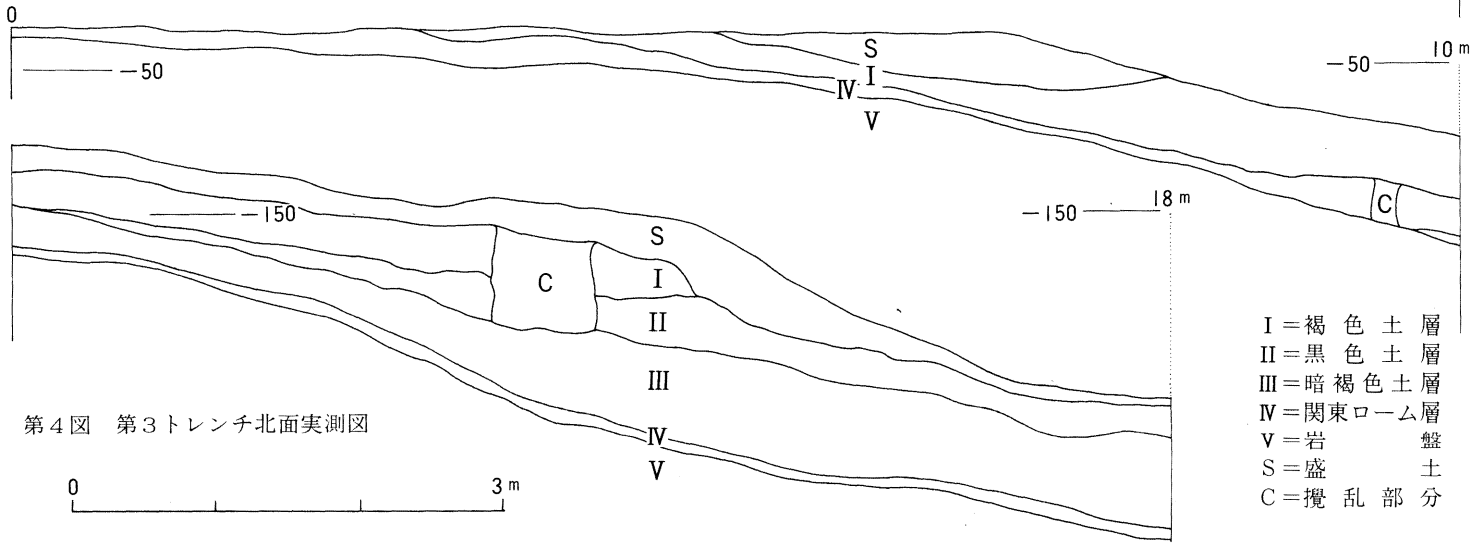
第１図　紅取遺跡付近地形図



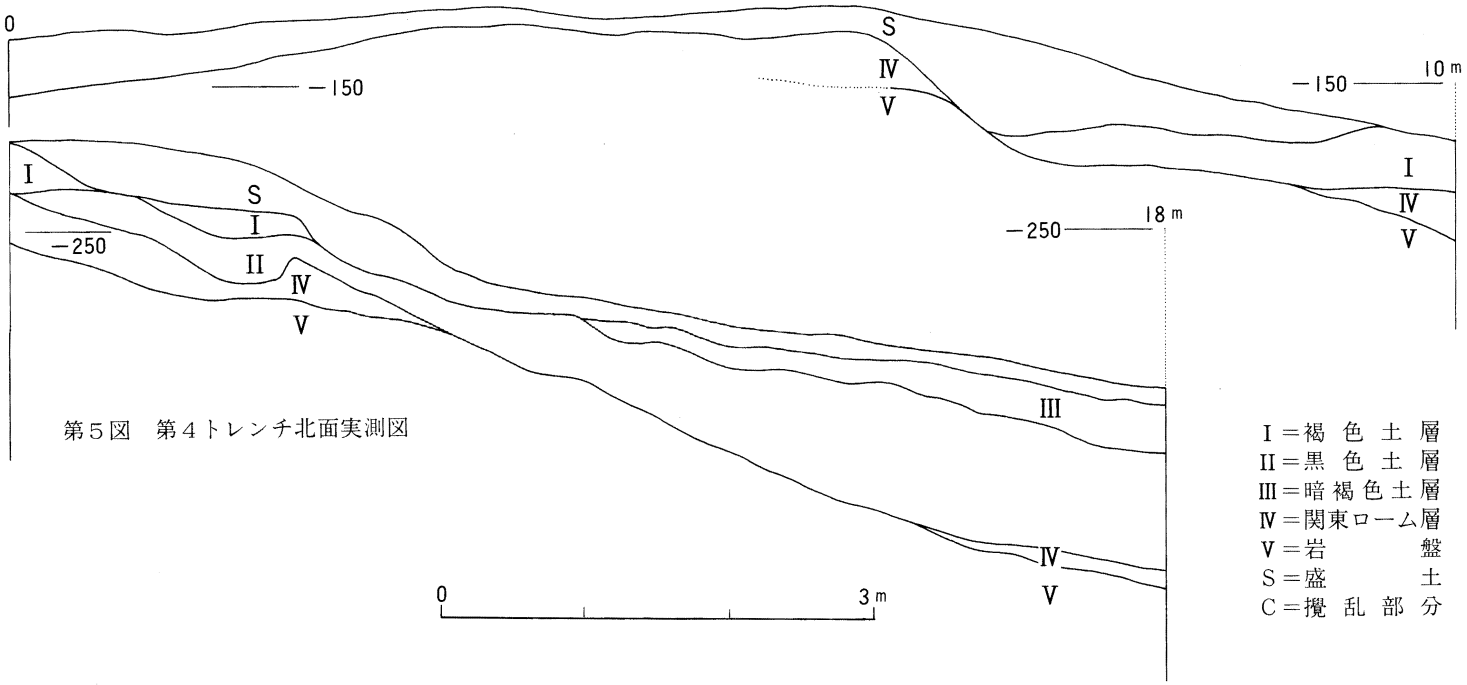
第２図　Ａ地点地形図



第３図　第１トレンチ北面実測図

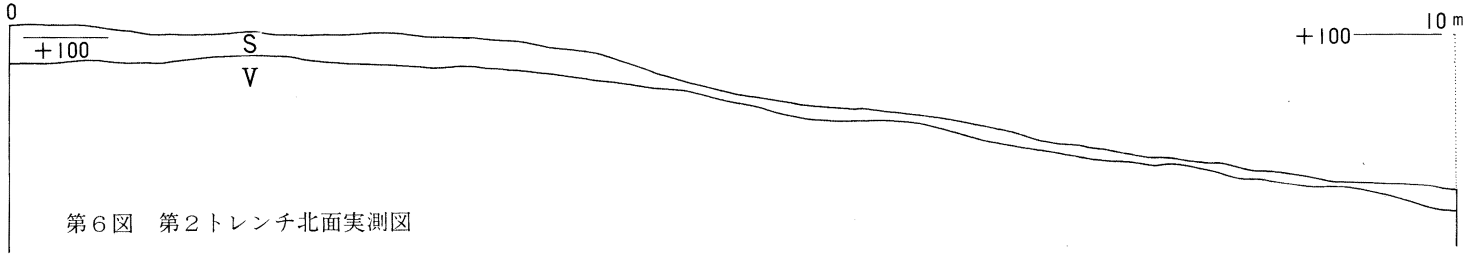


第４図　第３トレンチ北面実測図

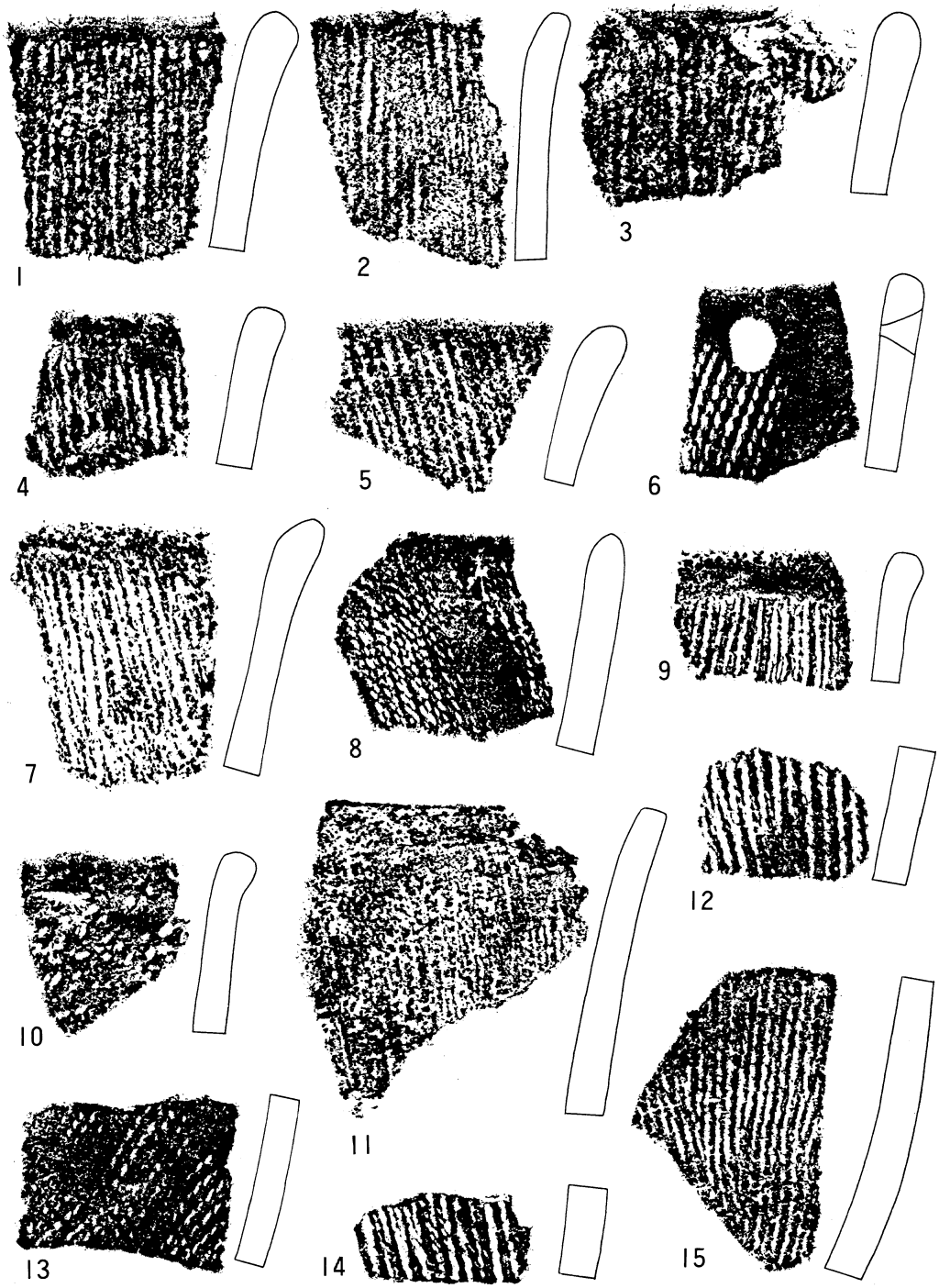


第５図　第４トレンチ北面実測図

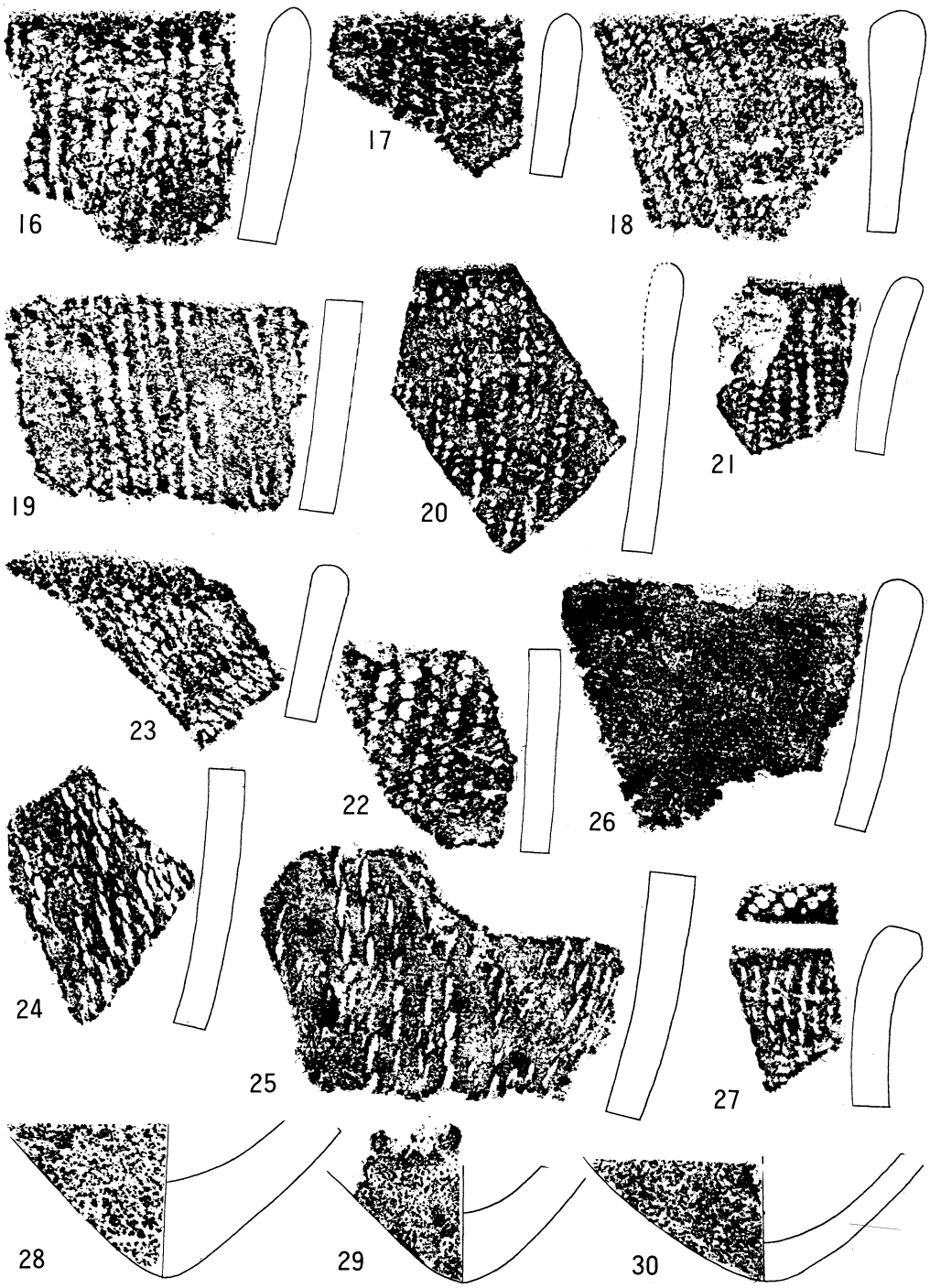
Ⅰ＝褐　色　土　層
Ⅱ＝黒　色　土　層
Ⅲ＝暗褐色土層
Ⅳ＝関東ローム層
Ⅴ＝岩　　盤
Ｓ＝盛　　土
Ｃ＝攪　乱　部　分



第６図　第２トレンチ北面実測図



第７図　出土土器拓本（１）　Ｂ類＝１～９・12・14・15　Ｄ類＝10・13
Ｆ類＝11　（縮尺 2/3）



第８図　出土土器拓本（２）　Ａ類＝27　Ｂ類＝23・28・29　Ｃ類＝16～22・30
Ｄ類＝24・25　Ｅ類＝21　Ｆ類＝26　（縮尺 2/3 ）

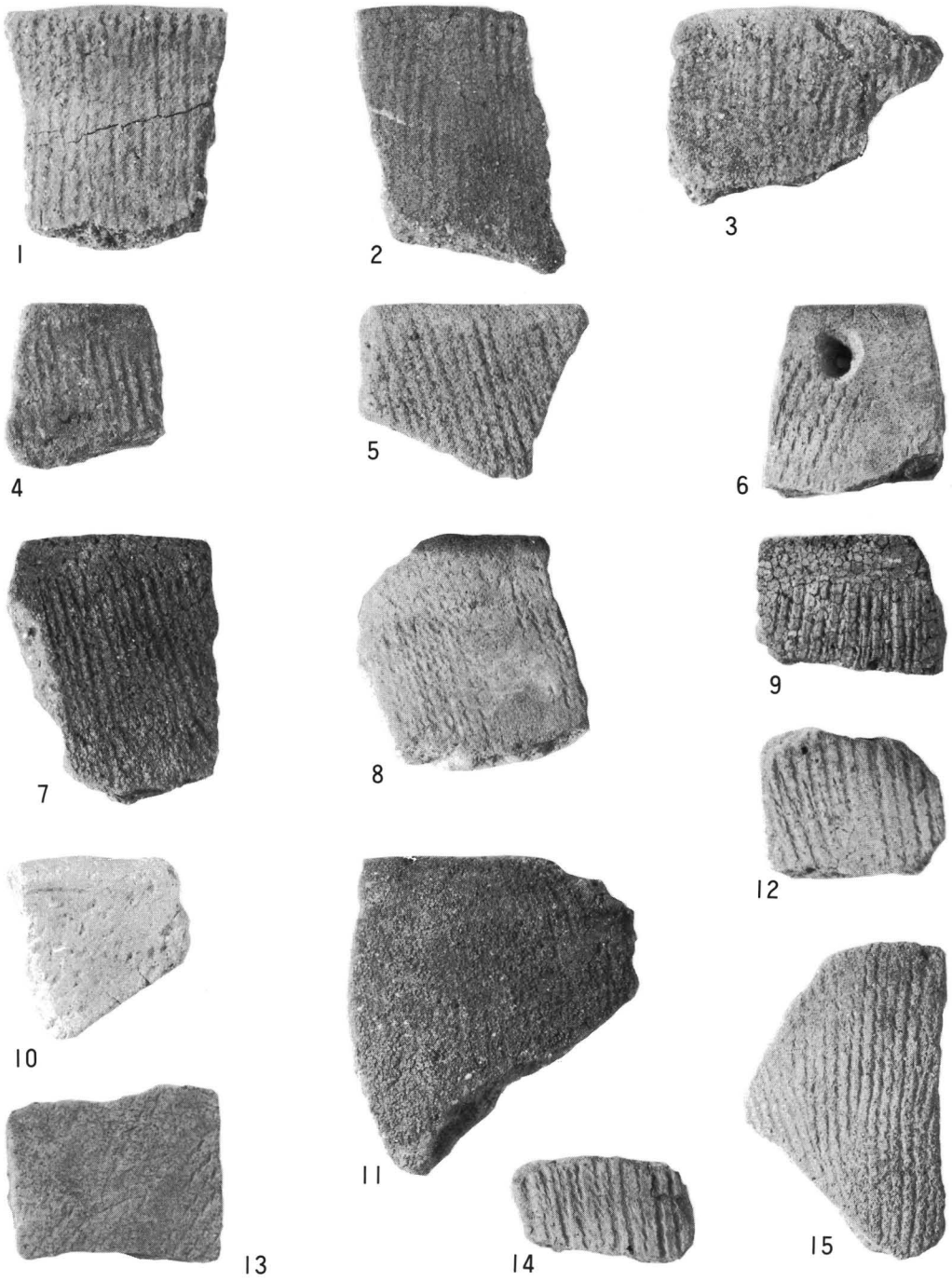
第９図　紅取遺跡出土土器拓本（収蔵品）　（縮尺 2/3 ）

（１）Ａ地点遠景（南方より）

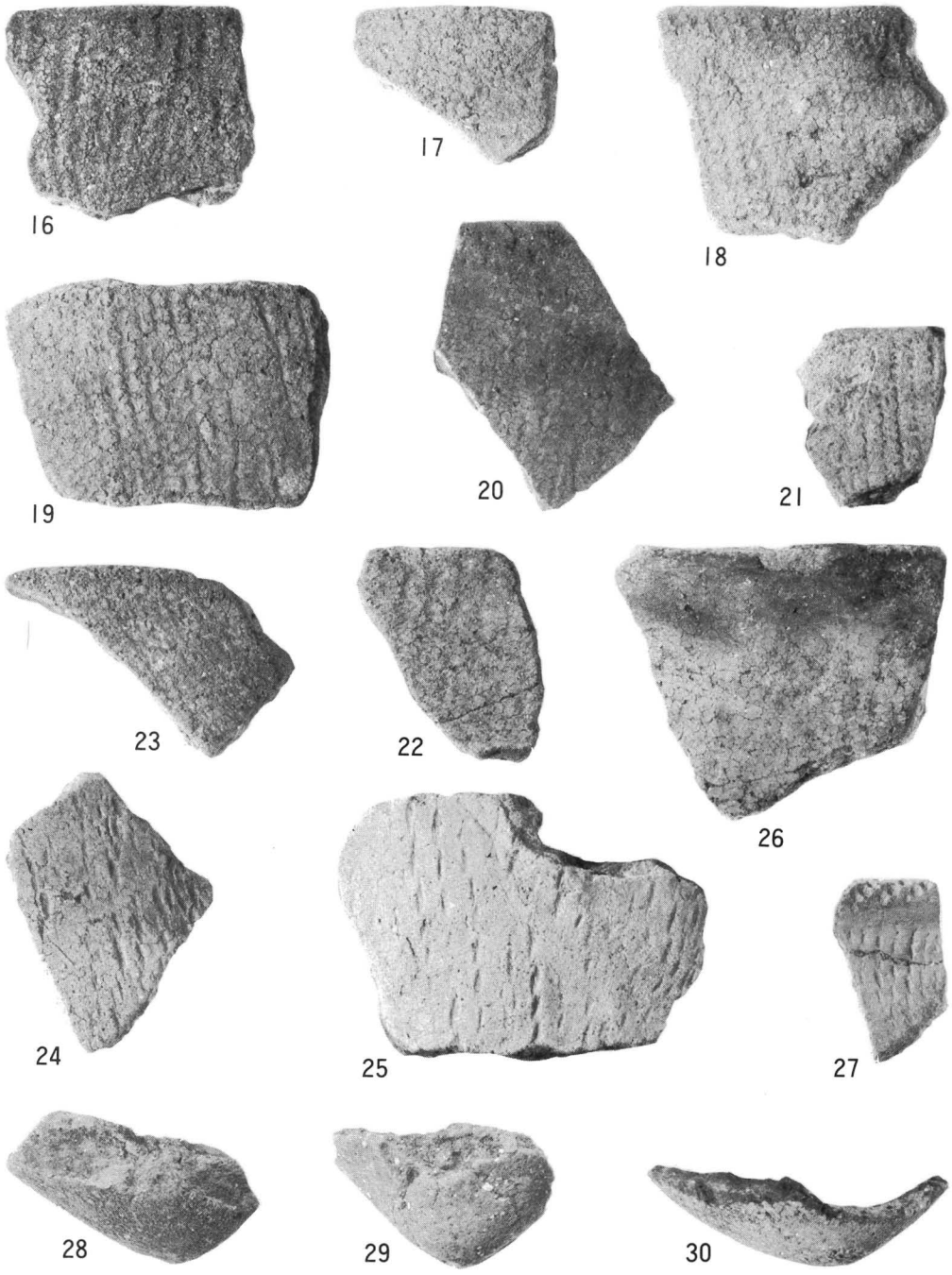
（２）Ａ地点の状態（北方より）

（１）第１トレンチ（西方より）

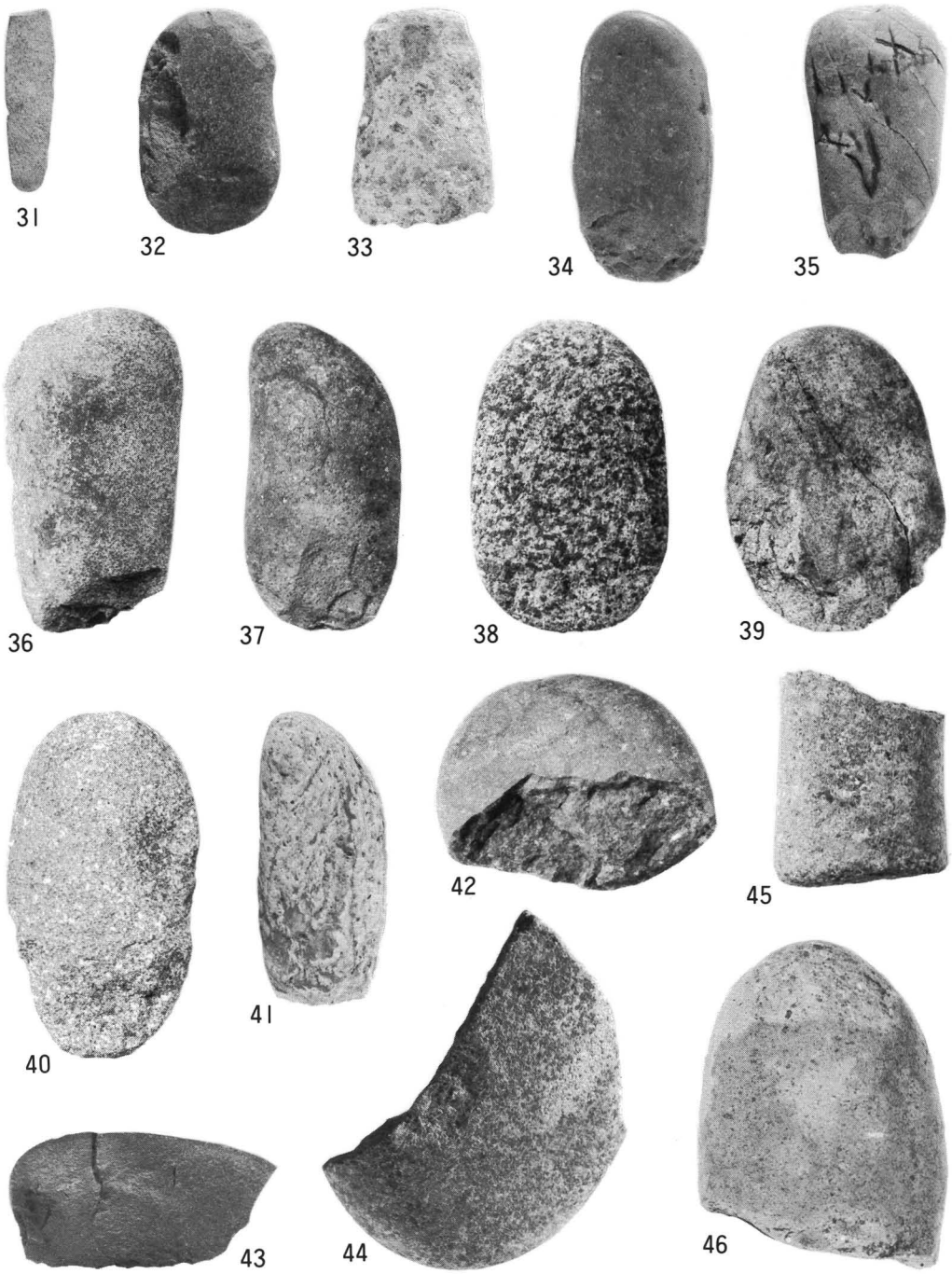
（２）第４トレンチ（西方より）



土器(１)　（縮尺 2/3）　Ｂ類＝１～９・12・14・15
Ｄ類＝10・13　Ｆ類＝11



土器（２）　（縮尺 2/3）　Ａ類＝27　Ｂ類＝23・28・29
Ｃ類＝16～22・30　Ｄ類＝24・25　Ｆ類＝26



石　器　　片刃形礫器＝34・35・37～42　両刃形礫器＝36　局部磨製石斧＝32・33
剝片石器＝31・43　スタンプ形石器＝45・46　磨石＝44

昭和55年 3 月25日　印刷
昭和55年 3 月31日　発行

編集兼発行者
神奈川県立博物館長
戸　栗　栄　次
横浜市中区南仲通5-60

印刷所　東邦印刷株式会社